

206

ちょっと拝見

「社会の公共財」として選ばれる病院を目指す



「在宅医療」といっような在宅医療の中心となる「在宅医療支援センター」のスタッフが笑顔で迎えている。

在宅医療支援センター
京都府で初めての「在宅医療支援センター」をスタートした。

「環境目標」を掲げて

京都府下最大規模の病院敷地にある医療法人社団恵心会 京都武田病院（武田節雄院長・240床、通称「中」）は、昭和56年（1981）に開設以来、地域の中心にあって、患者と病院がより良いパートナーシップを構築することを診療の基本方針として打ち出し、地域密着の医療活動を展開してきた。

18の専門科を擁する一方、難病科・ハイテククリニック・血液透析科・在宅医療支援科・在宅医療支援科外来などの特殊科（血液透析）に対応している。また、血液透析センター、FDセンター、総合リハビリテーションセンターの他、人工関節センター、手の外科センター、在宅総合ケアセンターなど幅広く特徴ある機能を有する。1日平均外来患者は約300人。

33歳の武田院長は、2年前の院長就任時に「選ばれる病院」になることを宣言した。「選ばれる病院」とは、普通は患者さんからということに

なりますが、当院では、その家族の方や職員、さらには出入りする業者にも選ばれるという意味合いを持った病院を目指しています。また、地域の医療機関との連携ということから言えば、地域の医療機関から選ばれるような病院にもならなければなりません。これが実現すれば、いいホスピタリティーが発揮できるのではないのでしょうか」と武田院長。

しかし、この落とし込みがなかなか難しい。そこで武田院長は「社会の公共財としての病院」という位置づけを明確にした病院づくりに着手したのである。その柱となったのが、環境問題解決への貢献と医療の質の向上。

武田院長が、特に環境問題に関心を抱いた発端は、京都青年会議所での一般企業の手先経営者たちとともに社会活動に参加したこと。この機会では「明るい豊かな社会の創造」をテーマに、子どもの教育、環境対策に関り込んで、地域についての発言とそれぞれの企業にできることを実践しようとしている。ここに参加したことで、武田院長は環境保

京都・医療法人社団恵心会 京都武田病院

〒600-8084 京都府下京区西牟田町11
http://www.kyotokita.jp



全に対して医療機関としての役割の大きさを認識。これが「病院の理念」「基本方針」「患者様の権利の尊重に関する宣言」に基づき「京都武田病院は、地球環境と共生し、地域住民の健康向上を目標とします」という「環境目標」を掲げるきっかけになった。同院では、全職員、職員にこの意識づけを徹底させているが、この活動によって事業所や団体も環境に配慮した取り組みを行っていることを証明する。京都独自の環境規格「KES・環境マネジメントシステム・スタンダード」の認定を取得した。これまでにグループの中では七瀬武田クリニック、タダダ野タリニックが認定されている。これによっ

て組織風気にもつながり、環境のみならず経営面でも成果を上げている。ただ、武田院長が目指しているのは、あくまで地域社会だ。医療施設も地域社会を構成する一員であるという認識からの取り組みについて「グループの全施設でKESを取得する予定ですが、職員の意識が自分の家族や子どもたちにも伝わり、環境改善が社会に向けて着実に広がりになっていくことが期待されるわけです」と語る。

「選」新とリハビリを柱に

「社会の公共財」として選ばれる病院になるため



ロビー

4床病室

明るく、やさしい雰囲気の病室には、窓際にトイレットペーパーが用意されており、患者様の快適さを確保している。

一般診療

3階は、患者と家族様との話し合いの場、治療からすると手厚いケアが、患者様の笑顔・健康増進につながる。環境にも配慮する。

特殊治療

患者と医師、看護士との話し合いの場。患者様の安心・安全を確保している。施設が安心・安全に安心して治療を受け、少しでも早く回復し、安心して帰るための取り組みが、スタッフ全員で取り組んでいる。

206

ちょっと拝見

京都・医療法人社団恵心会 京都武田病院



カンファレンス
職間で進捗、連携カンファレンスが行われている。病院全体の連携を促し、スタッフ全員の情報と知識の共有化、患者様の治療の向上に貢献している。



高層部と地域連携 協議室

研修室、理学療法室、作業療法室



リハビリテーションセンター 作業療法室

リハビリテーションセンター 理学療法室



スタッフ会議
リハビリテーションセンターで毎月、若手30人のスタッフが参加し、集約的業務でのスタッフの成長、ここで当たり前のこと。

回復期リハビリテーション科

開業する透析センター

のもう一つの柱である「医療の質の向上」について、掛け声だけではなく実態を作り上げるべく努力を重ねている。すでに第三者による病院機能評価やISO 9001 認証の取得を業としている。しかし、選ばれる病院として機能するためには、レベルの高い専門性を発揮しなければならぬ。そのために、地域で不足している「透析」と「リハビリテーション」における専門性を強化した。これを狙うのが、血液透析センターと総合リハビリテーションセンターだ。「透析」については、連携するタダダ野タリニックが血液・腹膜透析の外来機能を担い、同院の血液透析センターが比較的重症の人院患者の対応を担う。センターの施設は、一般の44床と個室3床が用意されている。全台テレビ・モニターテレビ（透析中の患者ビデオも準備）付きの電熱透析ベッドだ。また、在宅透析医療、京都へ観光・出張などで来た透析患者のために臨時透析を行っているのも特徴で、透析医療サービスにおける開口の広さには定評がある。そこには、腎臓、透析医学を専門とする武田院長の強い思い入れがある。武田院長が数年前役員となって2005年5月に設立された「NPO法人京都在宅透析支援センター」は、在宅透析医療を社会に認知・普及させることを目的としたNPO法人だが、現在、地域の医師、看護士、患者さんが参加して、透析医療レベルの底上げにも一役買っている。一方、リハビリテーションセンターを拠点とするリハビリ科も同院の柱の一つで、ハード面も充実している。理学療法室は、見通しのよい300㎡、作業療法室も100㎡とゆったりしている。この2つの部屋はスタッフ専用スペースであるため、患者さんや家族の行動チェックが可能。言語聴覚室は30㎡、いずれも最新の機械器具を完備している。ここに働く専任士は50人以上にはいる。また、落ちついた木目調の回復期リハビリ病室を完備し、ゆったりとした病室に全室個室とトイレを完備した回復期リハビリテーション科（90床）では、脳血管疾患や骨髄損傷、大腸がん術後併発など



地域医療連携の中心
医師と患者と地域との関係構築。こうした取り組みが「選ばれる病院」の第一歩。

ADLが低下した患者に対し、初期の段階に集中的にリハビリを行う。これによって寝たきり防止と短期間で社会復帰を図る。

医師、看護士、栄養士のスタッフが交えたカンファレンスも活発に行われ、まさにチーム医療の本質を発揮して、少しでも早い市民生活で社会復帰してもらえようという取り組みが展開している。その結果、在宅復帰率は90%以上というから、かなり高い（普通は70～80%）。

独自には施設後の訪問リハ、通所リハなどでフォローするが、地域医療全体の枠組みを考えた上での施策として、地域の他の医療機関とのネットワークによる地域連携パスを作成している。

「日本一の病院敷地」といわれる中において、選ばれる病院になるということは、武田院長がうらやまするほどには簡単ではない。しかし、病院を「社会の公共財」と位置づけることによって、地域社会を構成する一員である認識し、その病院としてできる活動のメカニズムを磨き上げることが、地域社会から選ばれる病院になるための取り組みの入り口にはかならない。



武田節雄院長

記事全文

「社会の公共財」として
選ばれる病院を目指す

□「環境目標」を掲げて

京都府下最大の病院激戦区にある医療法人社団恵心会 京都武田病院(武田敏也院長・240床、透析 47床)は、昭和56年(1981)に開設以来、地域の中にあつて、患者と病院がより良いパートナーシップを構築することを診療の基本活動として打ち出し、地域密着の医療活動を展開してきた。

18の専門科を標榜する一方、糖尿病・ペインクリニック・血液透析・在宅腹膜透析外来・在宅血液透析外来などの特殊外来(腹膜透析)に対応している。また、血液透析センター、PDセンター、総合リハビリテーションセンターの他、人工関節センター、手の外科センター、在宅総合ケアセンターなど幅広く特徴ある機能を有する。1日平均外来患者は約300人。

43歳と若い武田院長は、2年前の院長就任時に「選ばれる病院」になることを宣言した。「選ばれる病院」といって、普通は患者さんからということになりますが、当院では、その家族の方や職員、さらには出入りする業者にも選ばれるという意味合いを持った病院を目指しています。また、地域の医療機関との連携ということから言えば、地域の医療機関から選ばれるような病院にもならなければなりません。これが実現すれば、いいホスピタリティーが発揮できるのではないのでしょうか」と武田院長。

しかし、この落とし込みがなかなか難しい。そこで武田院長は「社会の公共財としての病院」という立ち位置を明確にした病院づくりに着手したのである。その柱となったのが、環境問題解決への貢献と医療の質の向上。

武田院長が、特に環境問題に関心を持った発端は、京都青年会議所での一般企業の若手経営者たちとともに社会活動に参加したこと。この勉強会では“明るい豊かな社会の創造”をテーマに、子どもの教育、環境問題に取り組んでいて、地域においての提言とそれぞれの企業にできることを実践しようとしている。ここに参加したことで、武田院長は環境保全に対して医療機関としての役割の大きさを実感。

これが「同院の理念」「基本方針」「患者様の権利の尊重に関する宣言」に並ぶ指針として「京都武田病院は、地球環境と共存し、地域住民の健康向上を目指します」という「環境目標」を掲げるきっかけになった。同院では、全職場、職員にこの意識づけを徹底させているが、この活動によって事業所や団体が環境に配慮した取り組みを行っていることを証明する、京都独自の環境規格『KES・環境マネジメントシステム・スタンダード』の認証を取得した。

これまでにグループの中では七条武田クリニック、タケダ腎クリニックが認証されている。これによって経費削減にもつながり、環境のみならず経営面でも成果を上げている。ただ、武田院長が目を向けるのは、あくまで地域社会だ。医療施設も地域社会を構成する一員であるという認識からの取り組みについて「グループ全施設でKESを取得する予定ですが、職員の意識が自分の家族や子どもたちにも伝わり、環境改善が社会に向けて普遍的な広がりになってくることが期待されるわけです」と語る。

□透析とリハビリを柱に

「社会の公共財」として選ばれる病院になるためのもう一つの柱である「医療の質の向上」について、掛け声だけではなく実態を作り上げるべく努力を重ねている。すでに第三者による病院機能評価やISO 9001認証の取得を果たしている。しかし、選ばれる病院として機能するためには、レベルの高い専門性を発揮しなければならない。そのために、地域で不足している「透析」と「リハビリテーション」における専門性を強化した。これを担うのが、血液透析センターと総合リハビリテーションセンターだ。

「透析」については、連携するタケダ腎クリニックが血液・腹膜透析の外来機能を担い、同院の血液透析センターが比較的重症の入院患者の対応を担う。センターの施設は、一般の44床と個室3床が用意されている。全台テレビデオ・モニターテレビ(透析中の教育ビデオも準備)付きの電動透析ベッドだ。

また、在宅透析医療、京都へ観光・出張などで来た透析患者のために臨時透析を行っているのも特徴で、透析医療サービスにおける間口の広さには定評がある。そこには、腎臓、透析医学を専門とする武田院長の強い思い入れがある。武田院長が旗振り役となって2005年5月に設立された「NPO法人京都在宅透析支援センター」は、在宅透析医療を社会に認知・普及させることを目的としたNPO法人だが、現在、地域の医師、看護師、患者らが参加して、透析医療レベルの底上げにも一役買っている。

一方、リハビリテーションセンターを拠点とするリハビリ体制も同院の柱だけあって、ハード面も充実している。理学療法室は、見通しのよい300㎡、作業療法室も100㎡とゆったりしている。この2つの部屋はスタッフルームを挟んでいるため、効率のよい患者の行動チェックが可能。言語聴覚室は3室。いずれも最新の機械器具を完備している。ここに働く療法士は50人以上にのぼる。

また、落ち着いた木目調の広い廊下や談話室兼食堂を備え、ゆったりした病室に全室洗面所とトイレを完備した回復期リハビリテーション病棟(60床)では、脳血管疾患や脊髄損傷、大腿骨頸部骨折などADLが低下した患者に対し、初期の段階に集中的にリハビリを行う。これによって寝たきり防止と短期間での社会復帰を図る。

医師、看護師、栄養科のスタッフを交えたカンファレンスも活発に行われ、まさにチーム医療の本領を発揮して、少しでも短い在院日数で社会復帰してもらえるような取り組みを展開している。その結果、在宅復帰率は90%以上というから、かなり高い(普通は70~80%)。

独自には退院後の訪問リハ、通所リハなどでフォローするが、地域医療全体の枠組みを考えた上での施策として、地域の他の医療機関とのネットワークによる地域連携パスを作成している。

日本一の病院激戦区といわれる中であつて、選ばれる病院になるということは、武田院長がさりげなく語るほどには簡単ではない。しかし、病院を「社会の公共財」と位置づけることによって、地域社会を構成する一員であると認識し、その病院としてできる活動のメカニズムを創り上げることが、地域社会から選ばれる病院になるための取り急ぎの入り口にほかならない。